

文 國 大 子 女

第百四十号

平成十九年一月発行

『月刈藻集』良源関連説話考……………	畑中智子(一)
——混乱の要因とその過程——	
『武蔵野』と一葉……………	峯村至津子(二六)
驚流狂言享保教本の用語……………	小林賢次(四)
『妙法院日次記』による開帳記録……………	八木意知男(六)
翻刻 金光教布教文書 近藤本『御道案内』……………	中前正志(五)
付 『御道案内』三本(藤沢本・近藤本・伊原本) 内容概略対照表	
彙報・編集後記……………	(三)

彙報

国文学会行事

○学会旅行 伊勢・松阪方面

九月十四日（木曜日）～十五日（金曜日）

引率教員（新聞・和田）以下学生二十五名が参加し、本居宣長記念館、斎宮歴史博物館、伊勢神宮（内宮）、神宮徴古館などをめぐりました。天候にも恵まれ、歴史と文学に親しむことのできた有意義な二日間でした。詳しくは後に掲げました学生の感想文をご覧ください。

○秋季公開講座（大学と共催）

十月二十七日（金曜日）三講時 於了校舎四二〇番教室

講題 勅撰和歌集の政治性

講師 皇學館大学教授 深津 睦夫 先生

研究室だより

○坂本信道先生が左記のように中古文学会賞を受賞されました。心からお祝いたします。

中古文学会賞（中古文学会創立四十周年記念）平成十八年度秋季大会 中京大学（二〇月七・八・九）において表彰式

坂本道信「さすらう官人たちの系譜——屈原・業平・貫之

——」 『中古文学』第七十八号（二〇〇六・一一発行）に掲載

伝統芸能のすすめ

大國一（能楽部室生念） 井上靖子

能と狂言は何百年も一緒に催されてきた。このふたつは全くもって正反対な特徴を持ち合わせたものだが、だからこそその相乗効果を出し合いながら共に演じられてきた。

源は能も狂言も同じ神楽である。神楽は神に奉納されるものだったが、それを人間も楽しもうと、「神楽」の「神」の字の、神を現す「しめすへん」を外した。そこで生まれた呼び名が「申楽」である。舞台後方には大きく松の絵が書かれている。その松は春日大社の、神が年に一度降臨される松である。降臨された神は日本中の芸能を楽しまれる。だが、「神様に向かってお尻を向けて演じるとは何事だ」との批判がとんだ。そこでその松は鏡に映つ

たものだとされるようになった。客席に松の木があり、それが映っている、ということだ。屁理屈かもしれないが、そこはとやかく考えず、ただ、神様がいつも見守っていてくれることは素敵なことだと思う。

狂言は野外で大声で演じることで人をひきつけ、笑いを基調とする。登場人物は太郎冠者など、名は特定されておらず、「近所に住むものである」と始めに言うことで客に親近感を与える。狂言は現実に基づいた身近なストーリーであり、そこから笑いを巻き起こす。

能は緊張感、息の詰まるような雰囲気や客にこの先どうなるのかと興味をもたせ、その場を去らせない。また狂言とは正反対に笑いというものを良しとしない。涙こそが美しいのだ。歴史上の人物に憧れを抱き、古い時代に迷いこませる。舞台では夢の世界を繰り広げる。主人公・シテである亡霊が昔語りをする形が多い。

正反対のようであるが、源が同じなだけに共通点も多い。腰を落とし、すり足で歩く。足運び、ターンの仕方なども同じである。そして舞台セットはほとんど用いず、ジェスチャーで表現する。能はすべてが型で構成されているが、狂言は比較的自由だ。

能の中に狂言の動きを見つけることは難しい。しかし狂言の中で

も能の型を、まれにだがみつけることができる。やはり同じ「申楽」なのだ。

公演の仕方は、一日に能の番組が五つと、間に狂言が入る。お陰で難しい能を見続けることもあまり苦にはならない。能で緊張し、狂言で緩む。能はより集中して世界に入り込めるし、激しいギャップも手伝ってか狂言では笑いが爆発する。ストーリーを練る際、ほとんどの場合は緩急をつけることが重要であるが、能と狂言はそれを極めた形とも言える。

狂言の強みは取っつきやすさと言葉がわかりやすいことだ。現代の、古典に深く精通していない人でも流れがつかめ、笑える。その点、能は言葉もわかりにくく、ストーリーも追いかいかもしれない。しかし両方とも七五調である。何をいつているか聞き取れなくとも、日本人なら聞いていて何となく心地よくなるリズムである。伝統芸能であっても敬遠せずに何度も見てもらいたい。見れば見るだけ知識も深くなり、より楽しめるはずだ。

狂言鑑賞会に参加して

大國一 林 靖子

狂言鑑賞会に参加しての感想ですが、もう面白かったとしか言
い様がありません。動きや、台詞と台詞の間の取り方、演者の方
の様々な場面での声の使い分けなど、全てが絶妙で思わず声を上
げて笑ってしまいました。また、茂山千三郎先生による能・狂言
の由来、舞台セットの説明、能と狂言の様々な違いなどの解説も
面白く、特に能の感情の表し方の説明は、今年新能に行ったけれ
ども能が全くといっていいほど理解できなかった私には、正直と
てもありがたいものでした。

そんなこんなで狂言に魅了された私は、パンフレットを穴があ
きそうなくらいじっくりと読んでいたのですが、ある所まで読み
進むと少し疑問が生じました。今回演じてくださった茂山家の
ホームページの名前が「お豆腐狂言 茂山家」なのです。どこか
ら豆腐がでてきたんだと思いつつホームページを見ると、そ
の理由が掲載されていました。

昔、狂言が一部の特別な階層の人々だけのものであった時代
に、茂山家の方が結婚式やお祝いの会に出向いては狂言を演じ続

けたので、余興に困ったら「茂山の狂言にしとこか」と言われる
ようになりました。すると、京都ではおかずに困ったとき「お豆
腐にでもしとこか」と言われていたため、それを揶揄して「茂山
の狂言はお豆腐や」と言われるようになったので、それを「お豆
腐狂言」としたのが名前の由来だそうです。しかしこの話には続
きがあり、茂山家の二世千作さんは「お豆腐で結構。それ自体高
価でも上等でもないが味つけによつて高級な味にもなれば、庶民
の味にもなる。お豆腐のようにどんな所でも喜んでいただけ狂
言を演じればよい。お豆腐のほうで文句をいう必要はない。より
おいしいお豆腐になることに努力すればよい」とおっしゃり、悪
口を逆手にとりました。そしてその言葉の通りに、今の茂山家は
誰からも愛される、飽きのこない、味わい深い、そんな「お豆腐
狂言」を広めていこうとなさつていくとのことでした。

私はこれを読んだとき、なるほどなと納得しました。やれ古典
芸能だ、伝統芸能だと肩に力を入れ、気を張って観に行つたはず
の狂言に親しみやすさを感じ、違和感なくなじめたのはこの「お
豆腐狂言」を目指す茂山家の方々のおかげだと思えます。もちろ
ん狂言自体が愉快で魅力があるというのも確かにあるでしょう
が、演者の方々の心もちが私達に伝わって、力を抜きリラックス
して楽しめたのだと思います。

せつかくふれることができた狂言。これからは暇な日には友達と一緒に豆腐狂言を観に行こうと思います。

狂言鑑賞会に参加して

短国一 杉原 早織

狂言を見たのは初めてでした。実際にもそうだし、テレビでもちらつと見たかな、見てないかなぐらいでした。まず前日に授業でビデオを見て驚いたのは、声です。おなかの底から張り上げるような声でびつくりしました。ミュージカルや演劇は何度か見たことがあるけれど、狂言独特の言い回しというか声の出し方、しゃべり方があり、そこが違っていておもしろいなあと思いました。

当日。まず解説がありました。そこでは能と狂言の違いなどを説明してもらいました。能では悲しみが美しいとされていて、一方狂言は笑いの要素がたくさんということです。能は全部の作品を見てみても「笑い」が一、二回しかでてこないというのには驚きました。狂言では「笑い」は手を大きく動かすそうで、その動きがおもしろかったです。

作品は、『千鳥』と『蝸牛』の二本立てでした。どちらもとても有名な作品だそうです。『千鳥』では酒を売ってくれない酒屋に対して何とか酒を手に入れようと、山鉾を引く様や流鏑馬の話をしたり馬に乗る真似をしながら隙を見て酒樽を持ち帰ろうとする太郎冠者が見どころでした。『蝸牛』は主人にカタツムリの特徴を聞いてそれを取りに行かされた太郎冠者が、間違えて山伏を連れて帰ろうとするやりとりがおもしろかったです。

最後に質疑応答の時間がありました。そこではなぜ狂言の世界には女性が少ないのかという質問がでて、昔から男性がやるように作られていることでした。またズボンの裾が長いのは位が高いからということも知りました。狂言って多分自分からは見に行かないし、今回こういう行事があつて見に行つていい経験になりました。新しい世界が見られたと思います。

国文学会旅行に参加して

大國二 西田 優子

今回の旅は、伊勢の地を巡る旅だった。

一目目で私が一番印象に残ったのは、本居宣長記念館に所蔵さ

れていた『端原氏城下画図』（国・重文）というものである。城を中心として整然と碁盤の目に並んだ家々。その家には住人の姓も書いてある。町を囲む地形も精密な線で描写されたこの地図、これを見ればこの町についてどんなことでも分かる気がする。が、「この端原氏城下町というのは日本の何処にあるのですか？」と問うたならば、その場所を答えられる者は、世界中誰一人としていないのだ。

何故ならこの地図は、十九歳の宣長が考え出した架空の町だからである。住人の系譜まで作るに及んだというが、この地図の例から、宣長の、見えぬものへ憧れ、想像力、そして見えぬものを、見える形として書き表そうとする願望が感じられるように思う。この心情は、その後の数々の偉業を成す過程でも宣長を突き動かしたものではなかったかと想像した。

今回、記念館を訪れた時には、『宣長の見た「日本」』というテーマの企画展が行われていた。そこで印象に残ったのは、『大日本天下四海画図』（国・重文）という、地図は地図でも日本地図である。これを書いたとき、宣長わずか十七歳。「今出回っている地図はことごとく在所が相違している、つまり間違っている」という直感から製作を始めた。これを書く前、一年を江戸で過ごしたことから、日本の国の大きさを宣長は実感した。そして「日

本」というレベルでものを見ようとすることに到った。宣長がこの地図を書いたのは一七四六年。日本地図で有名な伊能忠敬が第一次の測量の旅に出かけたのが一八〇〇年。時代が、日本というレベルで物事を見る方向へ動き出し、宣長はその先駆けであったように思う。そして宣長は地図ではなく、『古事記』や『源氏物語』をはじめとする古典や歴史書から日本の姿を探っていくことになるのである。

ちなみに、彼の学問の基本は丁寧に読み、丁寧に書き写すこと。学問をする時間はどうやって作ったかということについては、普段の仕事の効率よく終わらせ、時間を作ったと学芸員さんが言っておられた。

二日目の朝は伊勢神宮の内宮に参拝した。すぐ近くの旅館に宿泊できたおかげで、なんと朝六時に早朝参拝をすることができた。宇治橋（内宮への入口、五十鈴川にかかる橋）には朝霧が懸かり、一層神聖さを増していた。

二十年に一度、正殿（しょうでん）を始め御垣内（みかきうち）の建物を全て新造するという「神宮式年遷宮」という行事が行われるが、この行事は、神宮の古伝によると、制度化されたのは、天武天皇の御代のこと、第一回の式年遷宮が内宮で行われたのは、持統天皇四年（六九〇）のことである。以来、戦国時代の中

絶するという事態に見まわれながらも、一三〇〇年にわたって続けられて来た。

何故二十年に一度遷宮が行われるのかという理由については、現在においては、技術の継承という点で有効だということが大きい。掘立柱（ほったてばしら）に萱（かや）の屋根が特徴の神宮の建築様式は、唯一神明造（ゆいいつしんめいづくり）と呼ばれ、弥生時代にまで溯る高床式穀倉（たかゆかしきこくそう）の姿を今に伝えている。

旅の最後に朝熊（あさま）山（標高五五五m）に行った。朝熊山は、「お伊勢参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参り」と古くから謡われ、お伊勢参りをする人は必ずこの山に登った地である。山頂からは伊勢湾の青々とした海を見渡すことができ、こじんまりとした緑の島がいくつも浮かぶ風景は、『古事記』の冒頭のように神々が海に島々を浮かべたようだった。そして、山から見渡せる平地では遙か昔、高床式穀倉が建ち、緑の稲原が広がり、「豊葦原の瑞穂の国」（《神意によって稲が豊かに実り、栄える国の意》日本国の美称）の名に相応しい光景が広がっていたのではないかと想像した。

伊勢の国への旅路

大國一 小林 愛

二〇〇六年度・国文学会旅行の行き先は、御食つ国・神風の三重県伊勢市（萬葉集卷十三・三三三四より）だった。天照大神を祀る大神宮、伊勢神宮がそこにある。「斎王」という存在をご存知だろうか。歴代天皇に代わって神に仕えるため、伊勢神宮に使わされた未婚の皇女のことである。今回の学会旅行で、我々は遙か昔に斎王たちが歩んだ道筋を辿った。

京都を、牛車ならぬバスで出発した我々は、嘗て東海道と呼ばれた道を通って滋賀県を進んだ。途中、甲賀市に史跡があり、予定外に下車する。そこは垂水斎王頓宮跡といい、斎王が伊勢の国に向かう途中で宿泊した場所であった。高い杉林が空を覆った、ひんやりとした場所だった。今では、頓宮址と彫られた石碑の他に小さな社と井戸の跡しか残っていないが、このような頓宮は当時すぐに取り壊すのが通例であり、垂水の頓宮のように遺跡が現存しているものは大変珍しい。かの『源氏物語』に登場する六条御息所のモデルではないかと言われている斎宮女御徽子は、僅か九歳にして斎王に選ばれてここ垂水に泊まり、また四十九歳の時

に娘の皇女が斎王に選ばれた時も、母として付き添って再び垂水に宿泊した。その際、彼女が詠んだとされる歌の歌碑が残っている。

頓宮を後にした我々は、伊勢へと向かう最後の難関、鈴鹿峠を越える。バスの窓から景色を見ると、遙か山下の民家がとても小さくに見えた。三重県に入り、昼食に松阪市名産の松阪牛を頂く。流石御食つ国だ。因みに、あの赤福も三重県伊勢市が産地である。その後、松阪城跡を通り、本居宣長記念館へ行く。『古事記』『源氏物語』などの研究者として有名な宣長の、『古事記伝』自筆稿本を初めとする数々の重要文化財指定の資料などが展示されていた。次に我々が向かったのは、斎宮歴史博物館だ。そこで見たスライドには、神に仕える大役を任され、都を離れ山道を越え、伊勢を目指すまだ十歳にも満たない斎王の姿があった。我々がバスで辿った鈴鹿山脈を、当時は整備もろくにされていないのに徒歩と牛車で越えていたことも、驚くべきことである。その日の夕刻、ようやく伊勢市の宿泊場に入る。

翌日、とうとう伊勢神宮内宮を参拝する。まだ日も上がりきらないうちから、出来立ての赤福餅を求めてホテルを飛び出すメンバーもいた。人気の無い神宮への道程は、実に清々しいものだった。伊勢神宮は広い。皇大神宮を初め、全百二十五もの宮社から

なる。大人三人が手をつないでやっと抱えられそうな杉の大木が立ち並び、僅かな木漏れ日が深深と降っている。あたりは静謐に満ちていた。ふと既視感を覚えて考え込むと、なるほど、一日目に立ち寄ったあの垂水斎王頓宮跡と、空気がよく似ていた。ほとりを流れる五十鈴川で手を清め、内宮を参る。あまりに神殿が大きく敷地が広いため、全体は見えなかった。賽銭として、ご縁を担いだ五円玉を投げた。無事参拝を終え、神道博物館や神宮徴古館他、隣接する様々な資料館や美術館を回った。

最後に、朝熊山あさまを登って鳥羽市に入る。そこから見る伊勢湾・鳥羽港・志摩半島・点在する島々の大パノラマは絶景だった。この景色を題材にした柿本人麻呂の歌が、『万葉集』にある。また中でも、遥かに見える神島は、三島由紀夫の『潮騒』の舞台として有名だ。

こうして、伊勢の国の旅路は幕を閉じた。多くの文学の題材となった御食つ国。普段と全く違う環境の旅先で、先生方や先輩後輩と新しい発見をし、語り合うのは本当に楽しい。次回の学会旅行は、またどこへ旅立つのだろうか。

お知らせ

このたび、次のような『女子大國文』投稿規程を設け、今号から適用していくこととなりました。この規程に則って、ふるって投稿下さいますようよろしくお願い致します。

『女子大國文』投稿規程

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿で

あることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。
- ② ワードプロ原稿の場合、プリントアウトしたもの二部(審査用)と、投稿原稿が収められているフロッピーディスク一枚(ワード専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワードプロソフト名を明記すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。
- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・

ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはしない。

六、(投稿先)

投稿先は以下の通り。

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修

正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、(掲載論文の電子媒体による公開)

掲載された論文等は、電子媒体によっても公開する。

十一、(規程の改正)

- ① 本規程の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規程の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

編集後記

第一三九号でお知らせしたように、今号から投稿規程を設定し、査読制度を明確にしました。今号の査読・編集委員は次の方々です。

海老井英次・小椋嶺一・工藤哲夫・新聞一美・高見三郎・
中前正志・八木意知男

以上の各氏の他に、編集事務局から小林賢次と山崎ゆみが加わって編集委員会を開き、審議の結果五点の論文が掲載となりました。今後、必要に応じて外部査読等も取り入れるべく検討していきます。会員の皆様の積極的な投稿をお待ちしています。(小)

女子大國文

第百四十号

平成十九年一月十五日 印刷
平成十九年一月三十日 発行

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町三番地

編輯兼
発行者

京都女子大学国文学会

電話 〇七五、五三一九〇七六

FAX 〇七五、五三一九一二〇

振替 〇二〇八〇一五二三一四

〒602-8204 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇七五、四一四一〇八代

FAX 〇七五、四三二六二八二